

障害者支援施設における自閉症児者の過ごし方への配慮に対する生活支援員の認識

松山 郁夫*

Recognition of Residential Workers to Consider of Lifestyles of Persons with Autism
in the Facility for Disabled

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

障害者支援施設において生活支援員は、自閉症児者に対して様々な配慮をしながら支援をしている。自閉症児者の過ごし方への配慮に対する生活支援員の認識を明らかにすれば、生活の質を高める支援に繋がるものと考えられる。このため、本研究の目的は、障害者支援施設における自閉症児者の過ごし方への配慮に対する生活支援員の認識について明らかにすることとした。生活支援員を対象として、自閉症児者の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。得られた404名からの有効回答を分析した結果、生活支援員は自閉症児者の過ごし方への配慮に対して、「有意義な過ごし方の促進」、「情緒の安定の促進」、「社会性の向上の促進」、「他者との交流の促進」、「身体活動の促進」の5視点から捉え、この順に関心を向けていると考察された。

キーワード：自閉症 過ごし方への配慮 生活支援員 障害者支援施設

I はじめに

自閉症（DSM-5では「自閉スペクトラム症」や「自閉症スペクトラム障害」とされているが、以降「自閉症」と記述する）児者における主要な課題は、言語とコミュニケーションの獲得と指摘されている（Wetherby, & Prizant, 1999）¹⁾。その適応行動については、個人的または社会的充足に必要な日常活動の能力とされている（Sparrow, S. Cicchetti, Balla, 2005）²⁾。自閉症には言語や対人コミュニケーション等に関する独特な障害が認められ、適応行動がとれるように支援することが求められる。このため、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者の生活全般に対して広く目を向けながら支援を行っている。その際、自閉症児者をその心理状態、日常生活技能、社会適応技能の側面から捉えようとしている（松山 2012）³⁾。生活支援員は、自閉症児者の生活状況を幅広く捉えながら支援をしているため、社会適応ができるような配慮をしていると考えられる。

例えば、障害者支援施設でくつろいで過ごすお茶の時間において、生活支援員は、お茶の時間を「好みの尊重への配慮」、「心身の安定への配慮」、「周囲との交流への配慮」、「周囲の環境への配慮」の視点から捉え、この順に関心を向けている。これらの視点から支援していく際、自閉症児者がお茶の時

*佐賀大学大学院 学校教育学研究科

間を有意義に過ごすことができるように、その生活の質を高めていくような働きかけが不可欠である(松山 2016)⁴⁾。

障害者支援施設において、生活支援員は自閉症児者の独特な障害特性や行動特徴を考慮しながら、様々な配慮をしながら支援を積み重ねている。自閉症児者の過ごし方への配慮に対して、生活支援員がどのように認識しているのかが明らかになれば、日々の生活に対する支援のあり方を検討し、より充実した時間を過ごすことができるような配慮ができ、その生活の質を高める支援に繋がるものと考えられる。したがって、本研究の目的は、障害者支援施設における自閉症児者の過ごし方への配慮に対する生活支援員の認識について明らかにすることとする。

II 方法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、障害者支援施設の生活支援員を対象として、自閉症児者の過ごし方への配慮に関して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票による調査を実施した。

調査対象は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設(旧体系における知的障害者更生施設)において、青年期・成人期の自閉症者の生活支援を行っている生活支援員とした。無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送により配布し、回収した。合計 457 名から回収された。それらのうち、入所施設において自閉症に関わった年数が 1 年以上あり、主に関わっている対象者が知的障害のある青年期と成人期にある自閉症で、且つ全質問項目に回答している 404 名の質問紙調査票を有効回答とした(有効回答率 88.4%)。同時に分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種別を付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

男性 220 名(54.5%)、女性 184 名(45.5%)、年齢は 20 歳から 69 歳で、平均年齢 35.6 歳(SD11.0)、自閉症に関わった年数は 1 年から 30 年で、平均 7.3 年(SD 6.0)であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成 29 年 1 月 17 日より同年 3 月 17 日までの約 2 か月間とした。

調査方法は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設 70 か所に、独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。28 か所(送付した施設の 40.0%)から回答が得られた。なお、倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した施設に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化するため施設名は一切出ないことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 調査項目の作成手順

本研究で使用する質問紙調査票の作成にあたっては、障害者支援施設の生活支援員 10 名に対して、配布した質問紙票に書いてある「普段、障害者支援施設において自閉症児者の生活や過ごし方に対してどのような配慮をしていますか? 思いつく範囲で箇条書きにより、記入してください。」との文章を

読み、その後、同質問紙票の欄に記入してもらった。得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、35項目の質問項目を作成した。

その際の作成例として、「興味のあることを増やすようにする」と「好きな遊びの幅を広げるようにする」の回答を「5. 遊びや趣味の幅を広げる」、「自分でできることは自分から行う」と「できることはしてもらう」の回答を「19. できることは自分でする」とした。なお、自閉症児者の生活を支援する際、各ケースの状態に応じてきめ細かく行われるような配慮が求められる。そのため、回答に含まれている意味内容を大きく括らないように注意しながら質問項目を作成した。

自閉症児者の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問う独自の35項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」(1点)、「あまり気にしていない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度気にしている」(4点)、「かなり気にしている」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1から5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。加えて、各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

III 結果

自閉症児者の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問う独自の35項目の質問項目について、各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は2.73 (SD 1.005) 「25. 楽器を使った演奏を楽しむ」で、この項目以外は3点台(21項目:60.0%)か4点台(13項目:37.1%)であった。最大値は4.60 (SD .681) 「16. 安全な環境にする」であった。これら35項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.90であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた(近似カイ2乗値 5714.465 $p < .01$)。このため、35項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら35項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は9.69、3.02、1.94、1.64、1.38、1.23……というものであり、スクリープロットの結果からも5因子構造が妥当であると考えられた。そこで、5因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。

十分な因子負荷量を示さなかった7項目を除外して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、1項目が十分な因子負荷量を示さなかったため、これを除外して、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンは表2の通りであった。回転前の5因子で

27項目の全分散を説明する割合は54.96%であった。なお、これら27項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.88であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 4145.123 $p < .01$ ）。

各因子のCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子に関しては0.85、第2因子に関しては0.80、第3因子に関しては0.77、第4因子に関しては0.78、第5因子に関しては0.69であり、全項目で0.90との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は「興味や関心のあることをする」「楽しみを増やす」「興味・関心を尊重する」等、主として、自閉症児者が有意義に過ごすことを重視した内容であったため、「有意義な過ごし方の促進」と名づけた。

第2因子は、「利用同士で交流する」「人間関係を築く」「職員と交流をする」等、主として、自閉症児者が他者との交流を促すことを重視した内容であったため、「他者との交流の促進」と名づけた。

第3因子は、「ルールを守る」「使う道具を大切に扱う」「時間を守る」等、主として、自閉症児者が社会性の向上を重視した内容であったため、「社会性の向上の促進」と名づけた。

第4因子は、「歌うことを楽しむ」「音楽を聴いて楽しむ」「楽器を使った演奏を楽しむ」等、主として、自閉症児者が身体を動かして活動することを促すことを重視した内容であったため、「身体活動の促進」名づけた。

第5因子は、「ゆっくりと過ごす」「休憩を十分にとる」等、主として、自閉症児者の情緒を安定させることを重視した内容であったため、「情緒の安定の促進」と名づけた。

以上のように名づけた。因子別の平均値は、第1因子 4.21 (SD 0.52)、第2因子 3.46 (SD 0.74)、第3因子 3.86 (SD 0.64)、第4因子 3.21 (SD 0.68)、第5因子 3.99 (SD 0.59) であった。

各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、5因子の平均値間には有意差が認められた（表3）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、各因子間すべてに有意差が認められた。

このため、障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者の過ごし方への配慮に関して、第1因子「有意義な過ごし方の促進」、第5因子「情緒の安定の促進」、第3因子「社会性の向上の促進」、第2因子「他者との交流の促進」、第4因子「身体活動の促進」の順に関心を向けていることが示唆された（表4）。

表1 自閉症児者の過ごし方への配慮に関する質問項目における平均値・標準偏差

質問項目	平均値	標準偏差
1. 休憩を十分にとる	3.88	.845
2. 水分補給をこまめにする	3.95	.794
3. 利用同士で交流する	3.02	.981
4. 和やかな雰囲気ですごす	4.33	.747
5. 遊びや趣味の幅を広げる	3.87	.822
6. 職員と交流をする	3.74	.954
7. ゆっくりと過ごす	4.11	.766
8. 楽しく過ごす	4.28	.754
9. 静かに過ごす	4.01	.863
10. 楽しみを増やす	4.21	.764

11. 地域の人と交流する	3.06	1.025
12. 時間を守る	3.48	.982
13. 音楽を聴いて楽しむ	3.41	.953
14. 歌うことを楽しむ	3.08	.983
15. 人間関係を築く	3.39	1.030
16. 安全な環境にする	4.60	.681
17. 興味や関心のあることをする	4.28	.707
18. 使う道具を大切に扱う	3.76	.947
19. できることは自分でする	4.25	.877
20. ルールを守る	3.94	.877
21. 気候に応じた服を着る	4.39	.716
22. 利用者の人間関係を大切に	3.99	.909
23. 体操等の全身運動をする	3.50	.876
24. 工作等手指活動をする	3.34	.856
25. 楽器を使った演奏を楽しむ	2.73	1.005
26. ストレスを発散する	3.92	.816
27. 外出をする	4.13	.760
28. お茶の時間を楽しむ	3.58	.951
29. 努めて身体を動かす	3.63	.857
30. 他者と協力する	3.18	1.045
31. 買物をする	3.60	.896
32. 興味・関心を尊重する	4.26	.724
33. 余裕のある生活をする	4.04	.767
34. 作業に取り組む	3.89	.854
35. 生活のリズムを整える	4.33	.751

表2 自閉症児者の過ごし方への配慮に関する質問項目における因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子「有意義な過ごし方の促進」					
17. 興味や関心のあることをする	.794	.037	.140	.031	.199
10. 楽しみを増やす	.751	.047	.055	.062	.014
32. 興味・関心を尊重する	.637	.026	.020	.023	.075
5. 遊びや趣味の幅を広げる	.625	.144	.016	.091	.134
27. 外出をする	.556	.199	.005	.180	.064
16. 安全な環境にする	.519	.036	.141	.075	.119
8. 楽しく過ごす	.508	.235	.112	.065	.253
33. 余裕のある生活をする	.440	.017	.058	.008	.232
第2因子「他者との交流の促進」					
3. 利用同士で交流する	.087	.693	.005	.042	.009

15. 人間関係を築く	.015	.687	.059	.035	.023
6. 職員と交流をする	.021	.623	.042	.001	.083
30. 他者と協力する	.153	.510	.189	.264	.025
22. 利用者の人間関係を大切にす	.147	.494	.186	.073	.003
第3因子「社会性の向上の促進」					
20. ルールを守る	.070	.042	.835	.051	.027
18. 使う道具を大切に扱う	.053	.150	.623	.075	.011
12. 時間を守る	.070	.119	.543	.096	.186
19. できることは自分です	.276	.125	.511	.078	.067
34. 作業に取り組む	.080	.002	.414	.071	.129
第4因子「身体活動の促進」					
14. 歌うことを楽しむ	.104	.179	.200	.729	.104
13. 音楽を聴いて楽しむ	.197	.009	.113	.688	.016
25. 楽器を使った演奏を楽しむ	.062	.089	.024	.589	.008
24. 工作等手指活動をする	.096	.110	.311	.558	.142
23. 体操等の全身運動をする	.039	.074	.188	.459	.145
第5因子「情緒の安定の促進」					
7. ゆっくりと過ごす	.043	.189	.140	.115	.722
1. 休憩を十分にとる	.110	.005	.040	.045	.689
2. 水分補給をこまめにする	.045	.050	.020	.146	.497
9. 静かに過ごす	.095	.094	.052	.008	.474

表3 自閉症児者の過ごし方への配慮に関する質問項目における分散分析の結果

区 分	平方和	自由度	平均平方	F値
過ごし方への配慮	262.180	4	65.545	262.315*
被調査者	421.382	403		
誤 差	402.792	1612	.250	
全 体	1086.354	2019		

*p<.05

表4 自閉症児者の過ごし方への配慮に関する質問項目における多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子「有意義な過ごし方の促進」	.745*	.345*	.995*	.222*
第2因子「他者との交流の促進」		.400*	.250*	.523*
第3因子「社会性の向上の促進」			.650*	.122*
第4因子「身体活動の促進」				.773*
第5因子「情緒の安定の促進」				

*p<.05

IV 考察

障害者支援施設の生活支援員には、知的障害を併せ持つ自閉症児者が多く入所しているため、その生活状況を広く捉えながら生活を支援することが求められる。そのため、生活支援員は、自閉症児者の生活状況を全般的に捉えようとしている（松山 2012）⁵⁾。障害者支援施設において生活支援員は、自閉症児者の状態や生活状況を捉えながらその生活を支援している。本調査では、障害者支援施設の生活支援員に、自閉症児者の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問うた質問項目について、その平均値の6割が3点台、4割近くが4点台であった。したがって、生活支援員には、自閉症児者の生活全般に亘って配慮しながら支援しているという認識があるものと窺える。

自閉症の特性に応じた支援が、物理的環境の調整や補助的手段の活用によって、行動を統制し変容させることに向かつてはいけなさと論及されている（早川 2010）⁶⁾。障害特性を考慮した環境調整ではなく、自発的に適応行為ができるように支援していくことが求められる。障害者支援施設における余暇時間は、各々が自発的に過ごしている。その余暇時間に関して、生活支援員は、自閉症者の意思を尊重しながら余暇活動を楽しめるような配慮をしている（松山 2012）⁷⁾。このように、障害者支援施設において生活支援員は、集団生活を営む自閉症児者が自律した生活を営むことができ、その生活が豊かなものになるような支援を心がけている（松山 2017）⁸⁾。また、自閉症児者への支援は、その全人間像を総合的に捉え、接近していくものと指摘されている（村田 2016）⁹⁾。したがって、第1因子「有意義な過ごし方の促進」は、生活支援員が自閉症児者の日々の生活が豊かで意義あるものになるように、配慮していることを表しているものと考えられる。

自閉症児に対して、支援者が体験を共有しながら豊かな表現と共に言葉かけをし、言葉の獲得に繋がっていくとした結果、質問のおよび確認の指さしがやや高い頻度で出現するようになり、さらに幾つかの言葉が自発的に表出されるようにもなり、コミュニケーション行動の拡大が見られている。その背景として、興味・関心・自発性・対人関係などの面における発達が観察されている（今田 1988）¹⁰⁾。情動はコミュニケーションに関係し、コミュニケーションは言葉に関係していると言及されている（岡本 1982）¹¹⁾。それ故、自閉症児者には、他者との交流のなかでコミュニケーション行動を自発させる状況設定が不可欠である。このため、第2因子「他者との交流の促進」は、生活支援員が自閉症児者の生活を支援する上で、他者と交流する状況を設定し、他者とコミュニケーションをとる体験ができるように配慮していることを表しているのであろう。

自閉症児者は、適応行動を評価する尺度であるコミュニケーション・日常生活スキル・社会性の3領域（0歳児から6歳児の場合は運動スキル領域を加えた4領域）から成る Vineland 適応行動尺度（Vineland Adaptive Behavior Scales; VABS）を使用すると、すべての領域で低い値を示す（Williams, Mazefsky, Walker, et al., 2014）¹²⁾。近年、自閉症児者に対して、社会的スキルを獲得できるように SST（ソーシャルスキルトレーニング）が用いられているが、効果の検証が不十分で、訓練場面以外での般化や効果の維持に困難さがある（小西 2011）¹³⁾。これらのように、自閉症児者は社会的スキルによって適応行動をとることに困難さがある。しかしながら、障害者支援施設において集団生活をするためには、社会的ルールを守ることが求められる。このため、第3因子「社会性の向上の促進」は、生活支援員が、自閉症児者が生活の中で社会的規範を理解して身につけられるような配慮をしていることを表していると判断される。

1980年代以降、ソーシャルワーク実践理論においては、それまで主流であった病理・欠陥視点を批

判するストレングス・パースペクティブ (strengths perspective) という援助観が提唱されている。ストレングスとは、個人や集団が有している能力、資源、強みのことである (Saleebey, 1997) ¹⁴⁾。教育や福祉の現場からは、自閉症児に対する構造化による指導によりパターン化された行動が強化され、般化を阻害したり、構造化された環境でしか適応できなくなったりするとの批判が多い。このことは、自閉症児に対する根本的な治療を諦め、構造化された限られた環境条件の中で安定を図るという、単なる対症療法に過ぎないためである。構造化は、自閉症の認知を容易にしていけるのに効果があるが、そこに他の人間との交流を主としなくなることを問題としなければならないと指摘されている (石井 1999) ¹⁵⁾。

これらの知見から、自閉症の障害を軽減させ、発達を促進するためには、自閉症児の「能力、活力、成長、可能性」などのストレングスに着目し、それらを他者との相互交流の中で引き出して活用するアプローチが不可欠となる (松山・中島 2014) ¹⁶⁾。つまり、自閉症児者が興味や関心のある活動を他者と一緒に楽しむ機会が求められる。したがって、第4因子「身体活動の促進」は、生活支援員が自閉症児者のストレングスを見出しながら、他者と一緒に興味や関心のある身体活動に楽しく取り組むことができるように配慮していることを表しているものと推察される。

青年期になると身体面の成長や衝動性の亢進等から、自らに生じる不安に対処しようとした結果としてパニック状態が引き起こされやすい (小林 1999) ¹⁷⁾。このように、自閉症児者の社会への適応を阻んでいる問題行動の一つにパニックがある。パニックは同一・性保持の強い欲求・固執性からの二次障害として生じてくる場合と、予測できないことが急に起こった時の不安により起こってくる場合がある (高木・折笠・高島 2003) ¹⁸⁾。近年、職域のメンタルヘルス診療の中で、職場不適応や難治性うつ病の背景因子の一つとして自閉症が注目されている。以前考えられていたよりも頻度が多く、職場不適応や難治性うつ病のハイリスク要因として認識されるようになっている (堤 2016) ¹⁹⁾。自閉症児者の生活を支援する上で、その情緒の安定を図ることが求められる。これらより、第5因子「情緒の安定の促進」は、生活支援員が自閉症児者の情緒の安定を心がけていることを表していると言えよう。

自閉症児者へのレクリエーション活動を支援する際、充実した活動が行われることで、自己肯定感が高まり、情緒の安定に繋がる。自閉症児者が情緒的に安定すると、他者との交流を促し、安定した日常生活を営めるようになる (松山 2011) ²⁰⁾。有意義な過ごし方がなされれば情緒の安定に繋がる。また、周囲が自閉症の障害特性を理解して支援することで情緒的に安定し、コミュニケーションをとることができるようになってくると、社会的行為を理解できるようにする支援が求められる (松山 2013) ²¹⁾。コミュニケーション能力の改善をもたらすのは、毎日の生活の中でのやりとりの経験である。行動の改善をもたらしているのは、日々の関わりのなかの支持的な教示であることを忘れてはならないと述べられている (西村 2004) ²²⁾。情緒が安定すると他者とのコミュニケーションが成立しやすくなり、社会性の向上に影響を及ぼすことになる。

自閉症の社会的障害は、通常の一般的な学習の源泉や、他の人びとから得ることができる情緒面のサポートから遮断されるため、他の問題に比べるとはるかに深刻である (Wing, 1997) ²³⁾。自閉症児者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていくことを重視する必要がある (松山 2009) ²⁴⁾。他者との交流が増えれば身体活動が増えていく。

これらのことから、生活支援員は、自閉症児者における第1因子「有意義な過ごし方の促進」、第5因子「情緒の安定の促進」、第3因子「社会性の向上の促進」、第2因子「他者との交流の促進」、第4

因子「身体運動の促進」の順に関心を向けながら配慮しているものと推察される。

以上より、障害者支援施設の生活支援員には、「有意義な過ごし方の促進」、「情緒の安定の促進」、「社会性の向上の促進」、「他者との交流の促進」、「身体運動の促進」の5つの視点から、自閉症児者の過ごし方に広く配慮しながら支援を行うことで、その生活を充実させていく役割があると言えよう。さらに、これらの視点からその生活の質を高めるために、どのような支援のあり方が望ましいのかを検討し、療育の充実を図っていくことが求められる。

現実の中で、自閉症児者の療育を行っている障害者支援施設からは、「重度・最重度の知的障害・発達障害者の知能は幼児または乳児程度である。自立を目指してとか社会の中での交流を、といった綺麗ごとを言っている場合ではない。完全な保護と介護と育成が図られねばならない人達である。」と言及されている(楠 2016)²⁵⁾。理念に従うのではなく着実に自閉症児者の健やかな生活を生涯に亘って守っていくことの重要性が主張されている。

現時点では、障害者支援施設で生活している自閉症児者の多くは知的障害も併せ持っているため、地域における自立生活が困難であり、施設に入所して生活を継続することが望ましい場合が多い。地域において、自閉症児者が周囲から守られながら支援がなされるネットワークが整っていれば、理念として言われているように、地域において就労等を含めた自立生活を営むことができるかもしれない。しかしながら、地域のつながりが弱体化した状況では、包括的な生活支援が完備している障害者支援施設において生活支援員に支援を受けながら、より豊かな生活のあり方を模索する方が現実的で、確実に生涯に亘って支援し、守ることができると言わざるを得ない。

これらより、本研究から得られた生活支援員における自閉症児者への過ごし方への配慮に対する認識を、施設における自閉症児者の生活を充実させていくためにどのように役立てればよいのかを検討すること、および地域における自立生活のためにどのように活用すればよいのかを検討することが課題である。

V 結 論

障害者支援施設における自閉症児者の過ごし方への配慮に対する生活支援員の認識について検討するために、独自に作成した質問紙調査票を用いて調査を行った。その結果、生活支援員は、自閉症児者の過ごし方への配慮に対して全般に亘って関心を払うとともに、「有意義な過ごし方の促進」、「情緒の安定の促進」、「社会性の向上の促進」、「他者との交流の促進」、「身体運動の促進」の5つの視点から、この順に関心を向けていると窺えた。これらの視点から、生活支援員には、自閉症児者の過ごし方に広く配慮しながら支援を行い、その生活を充実させていく役割があること、および自閉症児者の生活の質を高めるために、どのような支援のあり方が望ましいのかを検討し、療育の充実を図っていく必要があることが考察された。

引用文献

- 1) Amy M. Wetherby, & Barry M. Prizant, Enhancing Language and Communication Development in Autism: Assessment and Intervention Guidelines. Berkell, Z. Autism: Identification, Education, and Treatment Second Edition LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES. 141-174 1999

- 2) Sparrow, S. S., Cicchetti, D. V., Balla, D. A., Vineland Adaptive Behavior Scales Second Edition MN: Pearson., 2005
- 3) 松山郁夫 自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 17(1) 111-118 2012
- 4) 松山郁夫 自閉症児者のお茶の時間を支援する生活支援員の認識 佐賀大学教育学部研究論文集 1(1) 133-141 2016
- 5) 松山郁夫 自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 17(1) 111-118 2012
- 6) 早川透 (2010) 「主体的な授業参加—子どもの側から問い直す」 『障害児教育実践の研究』 21号 障害児教育実践研究会 46-53
- 7) 松山郁夫 障害者支援施設における自閉症者への余暇支援のあり方—生活支援員に対する意識調査を通して— 福祉研究 104 58-65 2012
- 8) 松山郁夫 障害者支援施設における自閉症児者へのレクリエーション支援に対する生活支援員の認識 佐賀大学教育学部研究論文集 1(2) 83-91 2017
- 9) 村田豊久 自閉症 日本評論社 2016
- 10) 今田龍男 自閉児の言語能力を高めるためのこころみ 情緒障害教育研究紀要 7 61-68 1988
- 11) 岡本夏木 子どもとことば 岩波新書 1982
- 12) Williams, D. L., Mazefsky, C. A., Walker, J. D., et al., Association between conceptual reasoning, problem solving, and adaptive ability in high-functioning autism. Journal of Autism and Developmental Disorders 44 2908-2920 2014
- 13) 小西行郎 発達障害の子どもを理解する 集英社新書 2011
- 14) Saleebey, D. The Strengths Perspective in Social Work Practice 50-52 2nd Longman 1997
- 15) 石井哲夫 受容的交流理論覚え書 白梅学園短期大学教育・福祉センター研究年報 4 1-4 1999
- 16) 松山郁夫・中島範子 自由遊びにおける自閉症児のストレングス 佐賀大学教育実践研究 31, 149-156, 2014
- 17) 小林隆児 1999 青年期・成人期の自閉症 中根晃(編) 自閉症 日本評論社
- 18) 高木徳子・折笠美穂・高島美穂 高機能自閉症者のパニック軽減についての一考察: 事例Kを通じて 児童学研究 33 2003
- 19) 堤 明純 職場におけるメンタルヘルス不調のスクリーニング 総合健診 43(2), 313-319, 2016
- 20) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者に対する生活支援の有効性—旧体系における知的障害者更生施設の生活支援員に対する意識調査を通じて— 福祉研究 103 90-98 2011
- 21) 松山郁夫 自閉症児者への社会支援に対する家族の認識 研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集— 6(2) 1-12 2013
- 22) 西村辨作 自閉症児・者へのコミュニケーション支援を人という環境から考える コミュニケーション障害学 21(1), 47-51, 2004
- 23) Wing, L. 自閉症 (久保絃章・井上哲雄監訳) ルーガル社 1997
- 24) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 2009 309-316
- 25) 楠峰光 玄洋会便り 第129号 社会福祉法人玄洋会指定障害者支援施設昭和学園 2016

謝 辞

調査に際し、ご協力いただきました障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様、本論文を査読してくださった委員の方、編集に携わっている方々に、深く感謝申し上げます。